山口大学教育学部研究論叢　第73巻　381頁～388頁　2024年1月

台湾における環境教育カリキュラムの構造

－低学年「生活」教科書の分析をもとに－

山下　大喜*・生嶌亜樹子**・土屋　武志***

Curriculum Structure of Environmental Education in Taiwan:
Analysis of School Textbooks Used in Lifestyle Classes

YAMASHITA Daiki*, SHOJIMA Akiko**, TSUCHIYA Takeshi***

（Received September 6, 2023）

本稿は、低学年「生活」教科書をもとに、台湾における環境教育カリキュラムの構造を明らかにしようとしたものである。環境問題は、一国にとざされたものではなく、地球的課題としてどのように向き合うのかという「グローバル教育」の地平線にたって実践的可能性を模索しなければならない。しかしながら、小学校低学年の場合、冒頭からグローバルな空間認識のもとで実践を展開させていくことは難しい。ここで有効となり得るのが国際的な比較研究であり、台湾は日本と同じく低学年に「生活」があることから、「生活」教科書にあるプラスチックごみの削減を題材とした単元を取りあげ分析することで、比較カリキュラム論として国際的な参照軸から実践的可能性の展望を見出すことができる。

Key Words: Taiwan, Lifestyle Classes, Environmental Education, School Textbooks

はじめに

本稿の目的は、低学年「生活」教科書の分析をもとに、台湾における環境教育カリキュラムの構造を明らかにすることである。

日本では、環境教育について、1990年代を皮切りに環境基本法の制定など国内整備が進められ、「持続可能な開発のための教育（*ESD*）」など国際的な動向をふまえた実践的模索が展開されるようになった。2007年の学校教育法改正によって、第21条第２項には「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」と明記された[(1)]。小玉敏也は、これまでの環境教育を総括しながら、「〈学校〉を歴史・文化を継承・発展させる地域の拠点、生態系における地理的拠点、多様な主体が協働する教育活動の拠点として再評価し、*ESD*実践を『発信』する活動こそ強く求められている」としている[(2)]。太町智、中野真志は、「環境教育は小学校段階では早すぎるという見解があり、たとえ小学校で行われたとしても、意義深い環境教育は、高学年以外では実践されにくい現状が見受けられ」、「高学年や中学校以降の環境教育の実践も、表面的、形式的なレベルにとどまっているように思われる」と課題を指摘している[(3)]。そこで、太町、中野は、環境教育では「関心から参加にいたるまでの過程」と「ローカルなレベルからグローバルなレベルに発展するまでの過程」が重要となり、「身近な環境について関心をもち、理解し、参加し、そして新しい関心が生まれるというサイクルの繰り返しの中で、関心は徐々にグローバルな方向に広がっていき」、「この過程を、思慮深い教師がサポートすることで、彼らはやがて地球規模でも行動できる市民に成長するのである」と論じている[(4)]。小学校低学年といった場合、スタートカリキュラムとして接続の役割を果たす生活科が環境教育の重要な基盤となる。近年では、国連が提唱した「持続可能な開発目標（*SDGs*）」を背景に地球的課題とどのように向き合うのかという「グローバル教育」の点においても環境教育は喫緊の課題になってきている[(5)]。

これまでの研究蓄積をもとに新たな環境教育の可能性を見出すためにはどのようにすればよいだろうか。ここ

＊ 宇部工業高等専門学校一般科　＊＊ 山口大学教育学部　〒753-8513　山口市吉田1677－1　shojima@yamaguchi-u.ac.jp
＊＊＊ 愛知教育大学社会科教育講座

で有効となりうるアプローチとして以下の二つをあげることができる。第一に、実践の可能性を見出すための基礎研究である。このアプローチは、実践で取りあげる素材そのものに着目して、その概念構造および教材的価値を見出そうとするものである。例えば、萩原浩司は、脱炭素社会の実現に向けた動向をふまえながら、生活科教育におけるエネルギー概念の構造を整理している[6]。第二に、比較研究の方法論によりながら諸外国の事例を取りあげ、国際的な参照軸を得ようとするアプローチである。山下大喜、生嶌亜樹子、土屋武志は、台湾の「生活」教科書における食育の単元内容を検討している[7]。

そこで、本稿では、後者の比較研究によりながら、低学年における環境教育の可能性を展望するため、台湾の「生活」教科書を取りあげる。台湾では、2000年に暫定版、2003年に公布された「国民小中学九年一貫課程綱要」によって国民小学の低学年に「生活」が導入され、現行の「十二年国民基本教育課程綱要」では「自然科学」、「社会」、「芸術」、「総合活動」を横断する統合的カリキュラムとして位置づけられている。そのなかでも、環境教育は、ジェンダー平等、人権、防災などとともに重要なテーマ学習の一つに数えられている[8]。この環境教育について、「生活」教科書における環境教育の項目を整理した黄蕙蘭、林吟霞の研究[9]、環境教育をテーマにした教師教育カリキュラムの効果を検証した王順美の研究[10]がある。日本も小学校低学年に生活科があることから、比較カリキュラム論として台湾の「生活」を取りあげることで、低学年における環境教育の実践的可能性を展望するうえでの国際的な参照軸を得ることができる。

以上の背景をふまえて、まず第１節では、台湾における環境教育の歴史的過程とカリキュラムでの位置づけを通観する。そのうえで、第２節では、環境教育のなかでも、「生活」教科書におけるプラスチックごみ削減を題材とした単元を取りあげ、その内容を分析する。

１　台湾における環境教育

台湾において環境教育は、前述したように、現行の「十二年国民基本教育課程綱要」のなかで重要なテーマ学習の一つに数えられている。環境教育のこれまでの過程を行政・政策の面から振り返れば、1990年に教育部環境保護小組が設置されたことを皮切りに、環境教育の推進計画が打ち出され、2003年の「国民小中学九年一貫課程綱要」では重要なテーマ学習の一つとして明記されるに至った。2010年には環境教育法が制定され、2013年には総合的な部局とするために教育部の担当部局が資訊及科技教育司環境及防災教育科へと改組された。教育部は、台湾における環境教育のこれまでの蓄積を、（１）環境汚染の防止を目的とした環境保全教育、（２）自然保全を前提とした環境保護教育、（３）問題解決のプロセスとしての環境教育、（４）持続可能な開発を志向した環境教育の四段階に分けている[11]。特に、四段階目にあたる「持続可能な開発を志向した環境教育」は現行の「十二年国民基本教育課程綱要」に対応するものであり、2030年を目標に*SDGs*の社会実装が重要視され、*ESD*の理念を推進させていこうとしている。

「十二年国民基本教育課程綱要」において、環境教育は五つの項目（「環境倫理」、「持続可能な開発」、「防災」、「気候変動」、「資源の持続可能な活用」）に分かれて構成されている。具体的に、国民小学において、「環境倫理」では生態系のバランス、人と環境の相互関係、「持続可能な開発」では経済発展、生活スタイルの環境に対する影響、「気候変動」では気候変動の生活に対する影響、「防災」では災害の影響、「資源の持続可能な活用」では資源回収の重要性とそのための生活習慣がそれぞれ対象になっている[12]。そのうえで、学習項目と目標が以下のように整理されている（次頁：表１）[13]。

下記の表１にあるように、国民小学段階では17の目標が列挙されている。日本との比較カリキュラム論において、これら17の目標の特質を以下の三点に見出すことができる。

第一に、多くの目標で「気付く」ことが位置づけられている点である。国民小学は国民中学、高級中学へとつながる基礎・基本を育む学校段階でもある。日本の生活科においても具体的な活動や体験を通じた「気付き」が重要とされている。ここでの「気付き」は、「諸感覚を通して自覚された個別の事実であるとともに、それらが相互に関連付けられたり、既存の経験などと組み合わされたりして、各教科等の学習や実生活の中で生きて働くものとなることを目指している」[14]。具体的な活動や体験を想定しながら、教師は児童が「気付き」を質的に高められるような授業デザインを心がけ、同時に多様な「気付き」をみとる評価のあり方も考えておく必要がある。

第二に、野外学習、自然体験、生息地の保護など具体的な活動や体験における地域との連携が含まれている点である。台湾では2003年の「国民小中学九年一貫課程綱要」によってカリキュラムの大綱化がなされ、各学校がカリキュラムの編成主体となった。現行の「十二年国民基本教育課程綱要」では「学校を基盤としたカリキュラム開発」が重要視され、その志向性が「特色あるカリキュラム開発」にもつながると考えられている[15]。このときに重要となるのが地域との連携であり、連携を通じた教育リソースの充実化やそのリソースの効果的な活用を見込むことができる。この連携は、日本における学習指導要領の今次改訂で明記されたカリキュラム・マネ

ジメントでも重要な役割を果たすものである。生活科においても、自然とのかかわりでは、「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動」、「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動」、「動物を飼ったり、植物を育てたりする活動」がある[16]。特に、校外で活動や体験を展開させる場合は、「十分な活動時間を保障した上で、児童が安心して活動できる空間の確保に努めることも大切」となる[17]。授業単独だけではなく、学校カリキュラム全体を射程におさめたマクロ的視点も含めて検討を重ね、地域との連携を見出すことで、目標を具現化しながら児童の活動や体験をより豊かなものにすることができる。

第三に、環境教育で取りあげる項目は身近な生活に関連するとともに地球的な課題でもあるという点である。前述した太町、中野が論じるように、身近な生活から関心をもち、徐々に空間認識を広げることで、グローバルな見方・考え方を育むことが重要となる。近年、環境問題は一国ではおさまることのない地球的課題となりつつある。例えば、海洋プラスチックごみの問題は、中嶋亮太が論じるように、「私たちが捨てたごみが、やがて私たちの食卓に帰ってくるルートができつつあり、人間にも害を及ぼす『可能性』がある」課題でもある[18]。ただし、初等教育段階といった場合、冒頭からグローバルな空間認識のもとで思考を展開させていくことは難しい。そこで、まず重要となるのは、取りあげる素材の構造と学年段階に沿った教材的価値を整理し、教師自身が「学び手」として研究をすることである。そのうえで、特に低学年の場合は、前述した「気付き」との関係性を見出すことが重要となる。こうした研究を重ねていくとき、素材そのものの面白さや奥深さを感じとり、その教材的価値を見出すことが「学び手」としての教師にとって基礎研究にあたる部分であり、そのうえで先人の実践例が授業開発のうえで有効な参照軸となる[19]。ここに国際比較の横軸を加えることで、私たちはより広い地平線のもとで創造的な授業開発への展望を得ることができる。そこで、次節では、国際比較の一例として台湾における「生活」教科書を取りあげ、環境教育がどのように構成されているのかについて検討する。

表１　国民小学における環境教育

項目	国民小学段階
環境倫理	*E1*：野外学習と自然体験に参加し、自然環境の美、平衡、完全性に気付く。 *E2*：生物の生命の美と価値に気付き、動植物の生命を思いやる。 *E3*：人と自然の調和がとれた共生を理解し、重要な生息地の保護を進める。
持続可能な開発	*E4*：経済発展と工業発展の環境に対する影響に気付く。 *E5*：人類の生活がそのほかの生物と生態系に与える影響に気付く。 *E6*：人類の過度な物質的な欲求が未来世代に与える影響に気付く。 *E7*：人類社会における食料分配の不均等や貧富の差といった問題に気付く。
気候変動	*E8*：天気の温度、雨量の要素を認識し、気候の傾向および異常気象の現象に気付く。 *E9*：気候変動が生活、社会、環境に与える影響に気付く。 *E10*：人類の行動が気候変動の原因を引き起こしていることに気付く。
防災	*E11*：台湾がかつて経験した重大な災害を認識する。 *E12*：災害に対する警戒心、敏感さ、基本的な理解を養い、災害を免れるようにする。 *E13*：天災の頻度が増加していることとその影響が大きくなっていることに気付く。
資源の持続可能な活用	*E14*：人類の生存と発展、使用しているエネルギー源と資源の関係性に気付き、生活のなかで用いている自然エネルギーと自然物質を学習する。 *E15*：資源の過度な使用は環境汚染や資源の枯渇といった問題を引き起こしていることに気付く。 *E16*：物質循環と資源回収の原理を理解する。 *E17*：日常生活のなかで節水、節電を心がけ、物質的な行動をしないようにすることで、資源の消耗を減らす。

２　「生活」教科書の分析

台湾の学校教育で用いられる教科書は、民間の出版社が研究者や現職教員らと編集し、教育部の審査を受ける形となっている。実際の教科書採択は、各学校の教師が主体となる。日本との比較において、低学年の「生活」のみならず、中学年以降の「総合活動」にも教科書があることが台湾の特色であるといえる。本節では、そのなかでも「生活」教科書における環境教育の単元を取りあげる。分析対象としたのは、台湾で広く採用されている南一書局、翰林出版、康軒文教事業の三社の教科書である。

（１）南一書局「環保達人」

南一書局の教科書『生活２下』では第四単元に「環保達人」が位置づけられている[20]。単元の冒頭では、ごみを見つけ、収集し、分類する挿絵をもとに、環境を保つにはごみの分別が重要となり、資源の回収をきちんとすれば、ごみの減量にもつながり、地球環境をよりよくすることができるとある。そのうえで、一つ目の小単元「大掃除時間」は教室を協力して整理する場面から始まる。教室の掃除からごみの分別を進め、ペットボトルや缶などに下記のような図があることに気付く[21]。下記の図１はリサイクルして再利用できることをあらわしたものであり、日々の生活のなかでこの図があるものを書き出す活動をする。牛乳パックはきちんと水で洗って乾かしてから平らにしておくなど回収する際の工夫を実践したうえで、これまでの活動を振り返りながら教室にどのようなごみがあったのかについてクラス全体で共有をはかる。

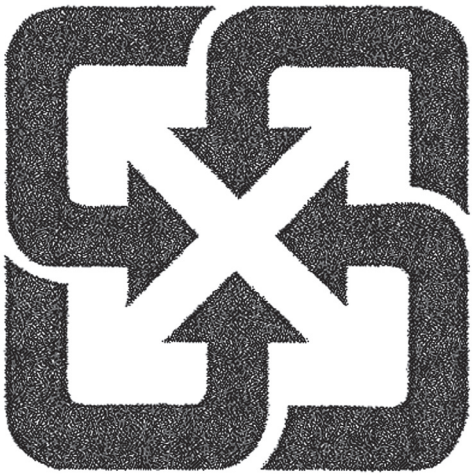

図１　リサイクル

二つ目の小単元「垃圾減量大作戦」は、一つ目の小単元をふまえて、クラスメイトとごみの削減について考える場面から始まる。一週間で自らが実践したごみ削減の方法を記録し、改めてクラス全体で共有する。クラスで共有した方法に対して、教師は継続性が大切であると助言している。

三つ目の小単元「神奇変身術」は、リサイクルできる資源を生活のなかでどのように活用できるかを考える場面から始まる。集めたペットボトルや牛乳パックから文房具入れをつくる、広告を折ってごみ箱をつくるなど、児童は再利用することで様々なものがつくれることに気付く。また、集めたものから楽器をつくり、それぞれの楽器から様々な音が出ることに気付き、クラス全体で環境保全をテーマにした曲を演奏し、単元全体がしめくくられている。

（２）翰林出版「減塑大作戦」

翰林出版の教科書『生活２下』では第一単元に「減塑大作戦」が位置づけられている[22]。単元の冒頭は、弁当を買いに行く場面になっている。

一つ目の小単元「塑膠垃圾」では、まず教室のなか、生活のなかにあるプラスチック製品を普段から多く使っていることに気付き、プラスチックごみが私たちの生活にどのような影響を与えているのかについて考える。インターネットで資料を探す、家にある絵本を読む、図書館で本を探す、家族へインタビューするなど調べる方法をすえたうえで、調査結果をクラス全体で共有する。この調査から、私たちだけではなく、多くの海洋生物たちもプラスチックごみの影響を受けていることに気付き、この現状をみて、どうして海に多くのプラスチックごみが流れてしまうのか、私たちに何ができるのかを考え始める。

二つ目の小単元「減塑小達人」では、一つ目の小単元の最後に出た問いをもとに、プラスチックごみを減らす方法を考える。クラス全体で、プラスチック製品を使わないようにする、繰り返し使う、ものを大切にする、リサイクルを心がけるなど方法を共有しあい、これらの重要性を多くの人々に知ってもらうためにポスター作成に取り組む。

ポスターは、図２（次頁）のように、テーマ、スローガン、内容、文字の大きさ、全体の構成を考えながら作成する[23]。いつ、どこで、どのように広報をすれば効果的かをクラス全体で話し合い、そのうえで最後にまとめとして作成したポスターをもってポスターセッションを実践する。

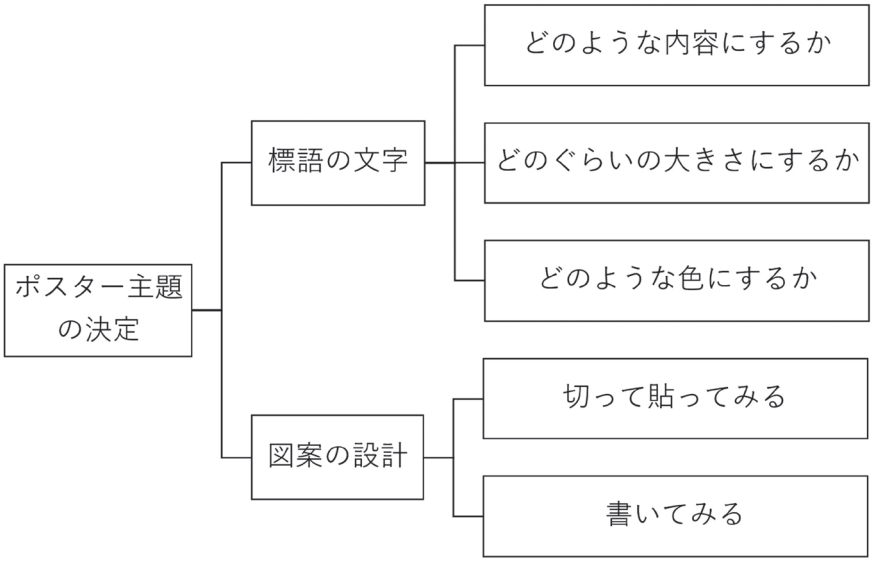

図２　ポスターの作成

（３）康軒文教事業「減塑行動家」

康軒文教事業の教科書『生活２下』では第一単元に「減塑行動家」が位置づけられている[24]。単元の冒頭は、多くのプラスチックごみが海をただよっている場面になっている。

一つ目の小単元「塑膠垃圾好可怕」では、プラスチックごみが環境に与える影響について、テレビや本で見たことや家族から聞いたことある話を共有する。そのうえで、どのようなときにプラスチックごみが出てしまうのかに着目し、生活記録をつけ、生活のなかから多くのプラスチックごみが出てしまうことに気付く。その問題解決のために、プラスチックごみを少なくできる方法を考え、１）使用量を減らす、２）再利用する、３）リサイクル回収するに分類する。

二つ目の小単元「我的減塑行動」では、一つ目の小単元で取りあげた削減の方法をもとに、プラスチック削減の目標を立てて実際に行動してみる。そして、その結果を共有しあいながら、どのようにしたら多くの人々がプラスチック削減に取り組めるようになるかを考え、下記の図３にあるように時間、場所、方法、分担などポスターセッションの概要を決める[25]。

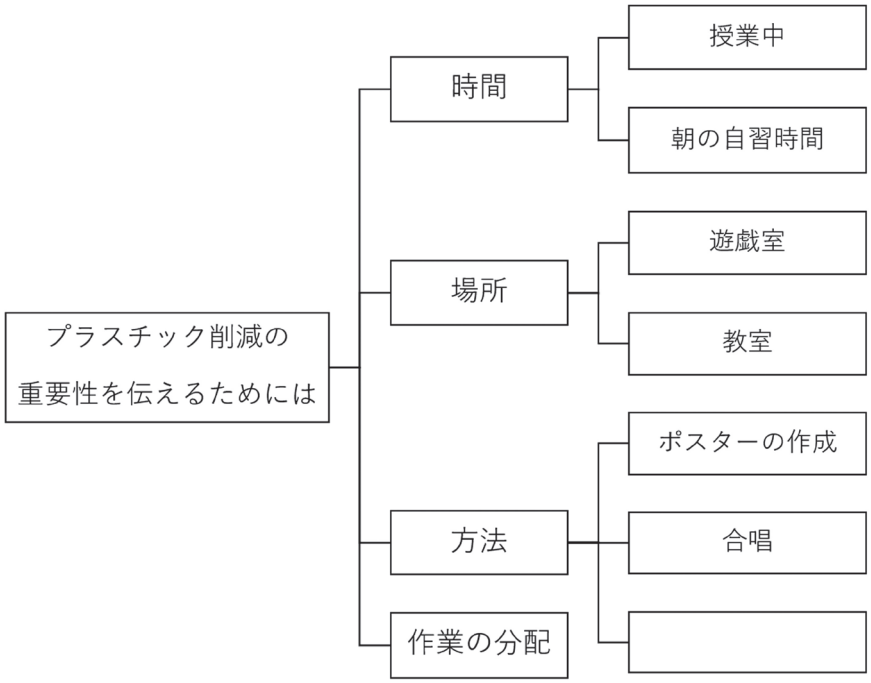

図３　ポスターセッションの概要

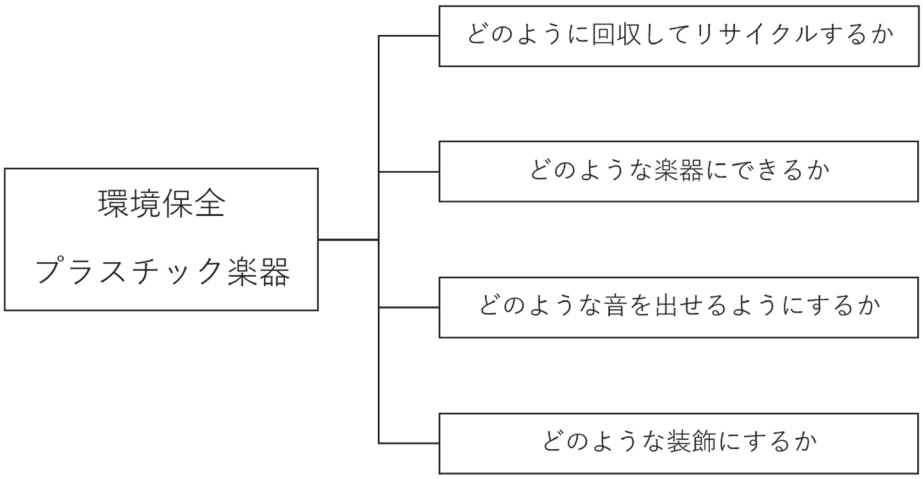

図４　リサイクル楽器の作成

また、楽器を演奏しながら、ポスターセッションをすることになり、上記の図４のように、リサイクル楽器をつくるために、材料をどのように回収するか、どのように楽器をつくるか、どのような音を出すか、どのような装飾にするかを考える[26]。楽器を作成し、準備ができ次第、楽器をもって演奏しながらグループでポスターセッションを実践し、単元がしめくくられている。

おわりに

本稿では、低学年における環境教育の実践を展望するため、台湾の「生活」教科書を取りあげた。日本と台湾において、生活科教育はスタートカリキュラムかつ横断的な統合的カリキュラムとしての役割を果たしている。グローバル化の進行によって、環境問題は国境をまたがる地球的課題としての性格をより帯びるようになり、私たち自身の生活にも大きな影響を及ぼそうとしている。そうしたなかでは、国際比較のアプローチによりながら、諸外国の実践事例を取りあげ、国際的な参照軸を得ることがより豊かな実践を開発するうえでも重要となる。総じて、台湾の「生活」教科書から見出すことができる展望として、以下の二点をあげることができる。

第一に、「気付き」の場面をどのように構成するかという点である。「気付き」は日本の生活科教育における鍵概念の一つであり、台湾の環境教育においても国民小学段階では「気付き」が重要視されている。この「気付き」を質的に高めることで、関心をもって対象への認識を深め、市民として具体的に行動できる段階へと進むことができる。環境問題を取りあげるとき、初等教育の場合、冒頭から世界的規模で対象を認識することは難しい。まず身近な生活経験から「気付き」を得て、徐々に空間認識を広げることが重要となる。台湾の「生活」教科書では、教室を整理し掃除する場面、多くのプラスチックごみが海をただよっている場面から始まっている。ここからごみの多さや生活への影響に気付き、ごみ削減の方法を考え、その重要性を伝える具体的な活動へと進んでいく。環境問題は地球的課題であると同時に、私たちの生活への影響に鑑みるに一市民として見逃すことのできない不可避な課題でもある。そこで、低学年の場合、「気付き」を基盤とした授業デザインが児童にとって環境問題へ関心をもつきっかけになる。この土台は単元後半での具体的な活動や中学年以降の教科学習へとつながる重要な基礎にもなるものである。

第二に、言語活動の充実化とどのように連動しながら、具体的な活動を展開させていくのかという点である。日本の学習指導要領では、今次改訂においても国語科を要としながら言語活動の充実化をはかることが求められている。なかでも、低学年はその基礎を育む重要な学年段階にもあたるため、スタートカリキュラムである生活科が中核的な役割を果たすことになる。台湾の「生活」教科書でも、図書館での探索や家族へのインタビューなどが設定されている。単元の最後には楽器の作成やポスターセッションがある。ここで特筆すべきは、前節の図２から図４にあったように、作成物のレイアウトやその作成プロセス、効果的な伝え方を整理しながら、活動が展開されている点である。台湾の「生活」に創作活動があるのは統合的カリキュラムとして「芸術」を含んでいるからである。さらに、ここに言語活動の視点が組み込まれていることになる。例えば、ポスター作成においても、いつ、どこで、どのように発表すればよいか、効果的な構成や方法を考えながら、最終的なポスターセッションへと進んでいる。言語活動の充実化との連動は具体的な活動の姿をデザインするうえで核となる歯車として機能し、この歯車は論理的な思考・表現の基礎を育むうえでも重要な役割を果たすものである。

【注】

（1）「学校教育法」（2007年）。

（2）小玉敏也「子ども・学校・社会をつなぐ環境教育」（小玉敏也、福井智紀編著『学校環境教育論』筑波書房、2010年、所収）20頁。

（3）太町智、中野真志「生活科・総合的な学習における環境教育についての研究　―地域社会環境のデザインとマネージメントへの子どもの参加―」（『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』第54輯、2005年、所収）19頁。

（4）前注（3）、19頁、27頁。

（5）藤原孝章は、「グローバル教育」を、「人やモノ、カネ、情報が国境を越えて広がる世界および社会（グローバリゼーション）とそれが引き起こす地球的課題について、教育はどう対応すべきか、どんな資質や価値観を育てていけばよいのかといった問題意識をもった教育」であるとしている。藤原孝章「グローバル教育」（日本国際理解教育学会編著『現代国際理解教育事典［改訂新版］』明石書店、2022年、所収）244頁。

（6）萩原浩司「脱炭素社会を目指した生活科におけるエネルギー環境教育に関する基礎的研究　―幼児期における環境教育との連携に基づく『エネルギー概念』を通じて―」（『皇學館大学教育学部学術研究論集』第4号、2021年、所収）。

（7）山下大喜、生嶌亜樹子、土屋武志「台湾における低学年『生活』教科書の分析　―食育に関連する単元を中心に―」（『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』第72輯、2023年、所収）。

（8）『十二年国民基本教育課程綱要　総綱』（教育部、中華民国103年11月）33頁。

（9）黄蕙蘭、林吟霞「生活課程教科書涵蓋『環境教育議題』之現況分析」（『教科書研究』第13巻第3期、2020年、所収）。

（10）王順美「実作為基礎的師培環境教育課程之研究」（『師資培育與教師専業発展期刊』第13巻第1期、2020年、所収）。

（11）教育部『環教扎根30年　新世代環境教育続航未来』（教育部、中華民国111年）9頁。

（12）国家教育研究院『議題融入説明手冊』（国家教育研究院、中華民国109年）45－46頁。

（13）表1は、前注（12）47－50頁をもとに作成。

（14）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　生活編』（東洋館出版社、2018年）12頁。

（15）一例として、台北市南港区胡適国民小学の先生方から、地域の茶園と連携した体験型学習の実践（「胡適遊学找茶趣」）についてご教示いただいた。ここに記して厚く御礼申し上げます。同校における胡適を題材とした人物学習については、山下大喜、生嶌亜樹子、土屋武志「胡適思想と戦後台湾　―思想的系譜とカリキュラム開発の交錯点―」（『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第6号、2021年、所収）を参照。

（16）前注（14）、38－45頁。

（17）前注（14）、54頁。また、生活科は「統合的カリキュラム」の性格をもっているため、指導上の留意点として前注（14）には、「他教科との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること」、「小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること」、「その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること」と明記されている（57頁）。

（18）中嶋亮太『海洋プラスチック汚染　―「プラなし」博士、ごみを語る』（岩波書店、2019年）5頁。

（19）日本の生活科でもごみ問題を題材とした実践例として、東篤志、峯田寛子、中山紀子「ごみ問題をテーマとした小学校生活科における環境教育の授業実践」（『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』第15号、2007年、所収）がある。また、海洋プラスチックごみを題材とした合科的な実践例として、鈴木一成、中嶋悠貴、尾関里都「教科等横断的な体育の学びに関する実践事例　－世界規模の海洋プラスチックごみ問題に着目して－」（『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第5号、2020年、所収）。先人の実践記録を「読むこと」については、山下大喜、白井克尚、生嶌亜樹子、久野弘幸「愛知県新城市立新城小学校における校内授業研究の基盤構築　―渥美利夫による校長室通信『考える』の分析をもとに―」（『歴史研究』第68号、2022年、所収）に詳しい。

（20）『生活2下』（南一書局、中華民国110年）80－103頁。

（21）図1は、前注（20）、86頁による。

（22）『生活2下』（翰林出版、中華民国110年）4－25頁。

（23）図2は、前注（22）、20頁による。

（24）『生活2下』（康軒文教事業、中華民国110年）6－27頁。

（25）図３は、前注（24）、19頁による。
（26）図４は、前注（24）、21頁による。

【付記】

本稿は、台湾における初等教育および教師教育をテーマとした執筆者三名による共同研究であり、「胡適思想と戦後台湾　―思想的系譜とカリキュラム開発の交錯点―」（『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第６号、2021年、所収）、「台湾における低学年『生活』教科書の分析　―食育に関連する単元を中心に―」（『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』第72輯、2023年、所収）からの継続的研究の成果である。